

文化

古都奈良の師走を彩る「春日若宮おん祭」は、春日大社の若宮の祭礼です。若宮の御祭神である天押雲根命（あめのおしごもねのみこと）様は、平安時代の長保五（1003）年に大宮（御祭神は第一殿・武甕槌命／たけみかづちのみこと）／第一殿・経津主命／ふつぬしのみこと）／第三殿・天兒屋根命（あめのこやねのみこと）／第四殿・比売神（ひめがみ）で御本社ともいいう）の第四殿に、水精とされる神秘な御姿で御出現。

長久二（1042）年には、第二殿と第三殿の間の「獅子の間」に御移座になつたと伝えられています。

その後、旱損（かんそん）や水害というような天候不順が連続して飢饉（ききん）となり、さらに追い討ちをかけるかのように疫病も流行。人々は窮屈し、社会不安が増大しました。そこで水徳の神とも称えられる若宮様のみすみずしい御神威にすがり、頻発するこれらの災害を収束させたいとの願いから、時の閑白・藤原忠通公が中心となり、御本社南方の現在の場所に新たに御本社と同規模の神殿を創建。長承四（保延元）（一

春日若宮おん祭にみる疫病退散の祈り

群衆しました。現在では、宮司や日使（ひのつかい）が祝詞を奏上するのですが、さらにおん祭を構成する神事芸能にも人々の幸福を願う祈りが込められています。

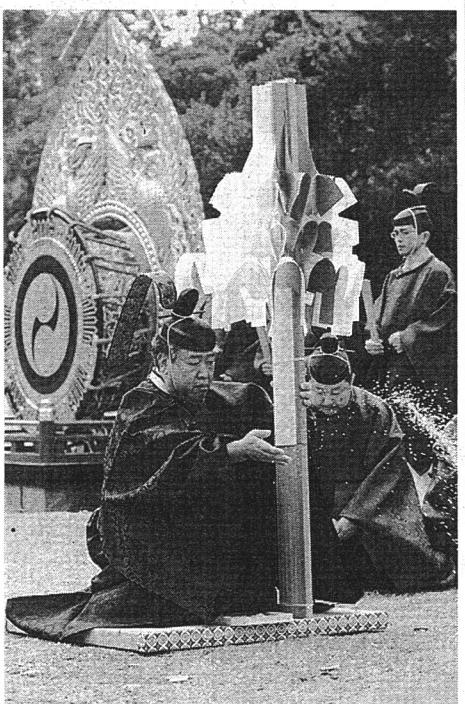
そして忠通公は、翌保延一（1366）年に五穀豊穣（ごくほうじょう）・万民和樂・悪疫退散（うじょう）を願い、大和国一国を挙げておん祭を斎行。

『中石記（ちゅうせき）』など、当時の公家の日記には、「おん祭が始まつてからは、おん祭の多雨もおさまり、むしろ千天の日が続いた」と記されています。

以来、おん祭は一度として中断することなく、連綿と奉仕され続け「新型疫病退散祈願」として斎行された昨年（令和二年度）のおん祭で、八八五回を数えます。

▼おん祭の災厄退散を祈る祭祀構造

九百年に及ぶおん祭の歴史の中で、疫病や飢饉に見舞われるたびに、若宮様の尊い御加護を頂こうと、人々は常に増しておん祭に



御旅所における宮司奉幣

（このようにおん祭は、諒闇のなかでも斎行される格別の祭

す。）

（このようにおん祭は、諒闇のなかでも斎行される格別の祭

す。）</